

馬 語

莫 言

(訳 有浦緑子)

粗くて大きな馬の鬣たてがみのようなブラシが顔の上を行ったり来たり触っていくように感じて、私は夢から目がさめた。目の前をひとつの大きな影が揺れ動いて、ちょうど重々しい壁のようだ。慣れ親しんだ匂いがわたしをどきどきさせて、興奮させた。私は突然、目を覚ました。

私の背後で現在の生活の場面がそっと姿を消して行き、太陽の光がきらきらと輝き、三十数年前のあの枯れて黄色い土塀を照らしていた。塀の上には枯草がさわさわと生えていて、一羽の、羽が輝く雄鶏がその上に立って高らかに歌っていて、塀の前には一つの傾き崩れかけた麦藁の山があって、一団の雌鶏がちらばった藁の中でついばんでいる。

さらに、一群の牛が塀の前につながれていて、みんな頭を垂れて、反芻している。その様子を見るとまるで考えにふけて黙想しているようだ。曲がった木の柱の上には牛の毛がびっしりとくっついていて、土壁の上に牛の糞がたっぷりと塗りたてられている。

私は藁の山の前に座った。そこは、手を伸ばせばその鶏に触れるし、ちょっぴり身体を前に伸ばせばその牛たちに触れる。私は鶏も触らないし、牛も触らないで、顔を上に向け彼を眺めていた。私の親友 —— 一頭の黒い色で、心が重くふさぎ込んでいて、尻に、Z 9 9の字を烙印されて、聞くところによると野戦軍から引退し、今は生産部隊の車を引いている。限りなく力持ちで、労苦もいとわな

い、名高い故郷の老馬だ。

「馬、やっぱりおまえか！」私は藁の山のそばから飛びだした。そのがっしりした首を両腕でしっかりと抱きしめた。私は感動して、涙の粒が彼のなめらかで艶のある皮膚の上どころがった。

馬は竹切り刀のような耳をそば立て、十分に世の移り変わりを経験したといったような話しぶりと言った。「いけません、わか、いけません、わかそんな様子ではわたしはうれしくございません。そんなふうになる必要などございません。さあ、ちょっとお座りになって、私があなた様にお話しすることをお聞きください。」

彼は首をちょっと揺り動かした。すると、私の身体は鳥の羽のように軽く地面から浮き上がって、麦藁の山のそばに移動させられた。そこからは手を伸ばせば鶏たちに触れるし、ちょっと身体を前に伸ばせばすぐ、牛に触ることもできる。

私はこの三十数年来会わなかった古い親友をしみじみと眺めた。彼は相変わらず往年の姿のままだった。大きい頭、立派な身体、細くて長い脚、濃い藍色の四つの蹄、ぼうぼうと乱れた白毛まじりの尾、何故かはわからないが見えなくなった二つの目。すると、様々な情景が突然目の前に浮かんできた。

私はかつてよく彼の尾の毛を切って琴①の弓を作った。彼はまるで壁のように黙ってかしくまっていた。私はよく彼のゆったりとした平らな背中の上に座って、絵本を読んだ、彼は微動だにしなくて、それはまるで浅瀬にのりあげた一艘の船のようだった。

私はよく隣の村の子供に彼を見せびらかした。彼の荣誉ある歴史をねつ造した。彼はかつて兵団の司令官を乗せて突撃し敵陣を陥れ、赫赫たる戦功を挙げたのだ、彼は一切声を出すことなく、まるで温度のないひとつの鉄の塊のようだった、などと話したものだ。

私はよく村の老人にむかって教えてと頼んだものだった。私は彼の生きてきた歴史を知りたかったのだ。特に彼がどのように失明したのかを知りたかったが、誰も教えてはくれなかった。私はよく彼の首を撫でながら尋ねた、「馬よ、おまえの目はなぜ見えなくなってしまったの？ 砲弾の燃え殻が飛び散って失明したの？ 結膜炎を患って失明したの？ 鷹がつついて失明したの？」——たとえ私が何千回何万回尋ねても、彼は答えることはなかった。

「今こそ、あなたにお答えいたしましょう。」馬は言った。馬が話をすると、その柔らかい唇は不器用にめくりあがって動き、藁などの餌で擦り減った雪のように白い大きな歯が度々のぞく。彼の声はとても重苦しく、まるで曲がった長々としたパイプを伝わって出てくるようだ。その声で私は夢中になり、陶醉し、驚き、ぞっとし、天からの声を聞いているような気がし、まじめに話を聞くしかなかった。

馬は話した。「日本に、ある有名な、目に関する物語がございます。春琴という盲目の三味線奏者は、ある人によって顔を傷つけられました。彼女の丁稚であり愛人でもある佐助もまたおのれの目を刺して失明したのです。〔谷崎潤一郎作『春琴抄』(1933)においては、もともと病気で盲目であった主人公が後に言い寄られた相手により、顔に火傷を負わされる。よって、ここは“盲目”を先に訳した。(訳者)〕

もう一つ古い物語もございます。エディプスは自分の父を殺し母と関係を持った後、後悔に苛まれ、自分で両目をつぶしたことで知られております。あなた方の村の馬マーウエンツァイ文才は、新婚の嫁をほっておけなくて、兵役を逃れるために石灰で両目をつぶしました。これでおわかりでしょう。世の中には同じような盲目の者がいるのです。彼らは、逃避するため、独り占めするため、美を追求するため、罰するため、心から希望して自ら自分の目を失明させたのでございます。

もちろん、あなたが一番お知りになりたいのは、わたしが何故失明してしまっ

たかですね……」馬は深く考え込んだ、この話は彼にとって際限なく辛い昔の出来事を呼び起こすのだ。馬は言った。「数十年前、私は確かに、軍馬でございました。私の尻の上の烙印がまさにその証明でございます。私の御主人様はある勇ましい将校でございました。ご主人様は容貌が抜きん出ているだけでなく、さらに兵法にもたけたお方でした。私はご主人様を一途にお慕いする気持ちが深まって、それはまるで恋をしているようでございました。

ある日、ご主人様はなんと、一人の白粉と紅の香りが鼻につく女の方を私の背中の上にお乗せになったのです。私の心は怒りでいっぱいになり、集中力を失ってしまい、林を通り抜けたとき、木にぶつかって、その女の方を振り落としてしまったのでございます。将校様は革の鞭でわたしをお打ちになり、私を罵りました、『このバカ馬め！目をどこにつけてる！』……

この時から、私は決めたのでございます、もう二度と私の目を開かないと……」
「なるほど、それでおまえは目が見えないふりをしていたのか！」私は麦藁の山の前から飛び出した。

「いいえ、私は見えなくなったのです……」、馬は言いながら、後ろに向きを変えるとあの果てしない尽きることのない暗黒の道に向かって真っ直ぐ振り返らず去って行った。

① 琴……ここでは二胡や京胡などの弦楽器一般を指している。

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社, 南昌市, 2013, pp. 1-3.)

(中国語原文)

马 语

莫 言

像一把粗大的鬃毛刷子在脸上拂过来拂过去，使我从睡梦中醒来。眼前

晃动着一个巍然的大影子，宛如一堵厚重的黑墙。一股熟悉的气味令我怦然心动。

我猛然惊醒，身后的现代生活背景悄然退去，阳光灿烂，照耀这三十多年前那堵枯黄的土墙。墙头上枯草瑟瑟，一只羽毛灿烂的公鸡站在上边引吭高歌，墙前有一个倾颓的麦草垛，一群母鸡在散草中刨食。

还有一群牛在墙前的柱子上拴着，都垂着头反刍，看样子好像是在沉思默想。弯曲的木柱子上沾满了牛毛，土墙上涂满了牛屎。

我坐在草垛前，伸手就可触摸到那些鸡，稍稍一探身就可以触摸到那些牛。我没有摸鸡也没有摸牛，我仰脸望着它——亲密的朋友——那匹黑色的、心事重重的、屁股上烙着“Z99”字样的、据说是从野战军里退役下来的、现在为生产队驾辕的、以力大无穷任劳任怨闻名乡里的老马。

“马，原来是你啊！”我从草垛边上一跃而起，双臂抱住了它粗壮的脖子。我心潮起伏，泪珠在它光滑的皮上滚动。

它耸耸削竹般的耳朵，用饱经沧桑的口气说：“别这样，年轻人，别这样，我不喜欢这样子，没有必要这样子。好好地坐着，听我跟你说话。”

它晃了一下脖子，我的身体就轻如鸿毛般的脱离了地面，然后就跌坐在麦草垛边，伸手就可触摸那些鸡，稍稍一探身就可以触摸那些牛。

我端详着这个三十多年没有见面的老朋友。它依然是当年的样子：硕大的头颅、伟岸的身躯、修长的四肢、瓦蓝的四蹄、蓬松的华尾、紧闭着的不知道什么原因盲了的双目。于是，若干情景就恍然如在眼前。

我曾经多次揪它的尾毛做琴弓，它默默肃立，犹如一堵墙。我多少次坐在它宽阔平坦的背上看小人书，它一动也不动，好像一艘搁浅了的船。

我多少次对邻村的小孩子炫耀它，编造它的光荣的历史，说它曾经驮着兵团司令冲锋陷阵，立过赫赫战功，它一声不吭，好像一块没有温度的铁。

我多少次向村里的老人请教，想了解它的历史，尤其想知道它是怎样瞎的，没人告诉我。我多少次抚摸着它的脖子问：“亲爱的马，你的眼睛是怎么瞎的，是炮弹皮子崩瞎的吗？是害红眼病弄瞎的吗？是老鹰啄瞎的？”——任我千遍万遍地问，它不回答。

“我现在回答你。”马说。马说话时柔软的嘴唇笨拙地翻动着，不时地显露出被谷草磨损了的雪白的大牙。它的声音十分沉闷，仿佛是通过一个曲折漫长的管道传递过来的。这样的声音令我痴迷，令我陶醉，令我惊悚，令我

如闻天籁，不敢不认真听讲。

马说：“日本有一个著名的关于眼睛的故事。琴女春琴被人毁容盲目后，她的徒弟也是她的情人佐助，便自己刺瞎了眼睛。

还有一个古老的故事，俄狄浦斯得知自己杀父娶母之后，悔恨交加，自毁了双目。你们村子里的马文才，舍不得新婚的媳妇，为了逃避兵役，用石灰点瞎了双目。这说明，世界上有一类盲目者，为了逃避，为了占有，为了完美，为了惩罚，是心甘情愿自己把自己弄瞎了的。

当然，你最想知道的，是我为什么瞎了眼睛……”马沉吟着，这个话题勾起了它无限辛酸的往事……马说：“几十年前，我的确是一匹军马，我屁股上的烙印就是证明。我的主人是一个英武的军官。他不仅相貌出众，而且还满腹韬略。我对他一往情深，如同恋人。

有一天，他竟然让一个散发着刺鼻脂粉气息的女人骑在我的背上。我心中恼怒，精力分散，穿越树林时，撞在了树上，把那个女人掀了下来。军官用皮鞭抽打我，骂我‘你这匹瞎马！’……

从此，我决定再也不睁开我的眼睛……”

“原来你是装瞎！”我从麦草垛前一跃而起。

“不，我瞎了……”马说着，掉转身，向着那漫漫无尽的黑暗的道路，义无反顾地走去。

